鈴木大拙の英学修行と現代学生気質

川崎医科大学　語学教室

芝田　敬

（平成25年10月15日受理）

Daisetsu SUZUKI's English Asceticism and Modern Students' Disposition

Kei SHIBATA

Department of Foreign language, Kawasaki Medical School
577 Matsushima, Kurashiki, Okayama, 701-0192, Japan
(Received on October 15, 2013)

概　　要

猛スピードで変容している現代と同様に，英語教育も刻々と変化している。しかし，人間の言語習得過程は確固として揺るぎのないもので，その基本を苦闘の中で成就した先人に見い出すことができる。本稿では鈴木大拙に焦点を当て，いかにして彼が英語を習得したかを考察し，今後の英語教育の在り方を考えてみたい。

キーワード：言語習得，鈴木大拙，英語教育

Abstract

English Education is rapidly changing like our modern society. However, the process to acquire language is absolutely rigid, which we find in our predecessors' struggle to acquire their languages. I investigate the way of teaching English, focusing on Dr. Suzuki's efforts of mastering the English language.

Key words: Language Acquisition, Daisetsu SUZUKI, English Education

はじめに

医学生にとっての英語教育はいかにあるべきかを問いながらすごしたこの４年間であるが，その方向性を求めようと筆をとっている。当初，意気込んで走り出したが，多くの関門に出会い頓挫しそうになりつつ現在に至っている。最も大きな関門は医学生達が課せられている膨大な学習量である。他大学（文科系）も兼務している本学外国人講師は，本学生の医師になるための学習量の多さを知り驚嘆している。６年間の無尽蔵とも思える学習量や，最終的に待ち構えている医師国家試験の重圧の中での学生達の本音は，「英語の学習をする時間があれば，医学の勉強をしたい。」ではないかと憶測する。

Correspondence to Kei SHIBATA
kei@med.kawasaki-m.ac.jp

このような状況下で英語に眼を向けさせるために苦闘しているのが現状である。しかしながら現在の国際社会の中で医師として生きていくためには英語力の向上は必須である。本稿では講義で学生に訴えている以下の３項目を中心に論を展開したい。

① 医学英文を数語単位で読み進める読解力。
② 医師としての文章を書くための英文作成力。(Paragraph→Essayと展開できる作文力。)
③ 患者と英語で話ができる医師としての談話力。

①②は英語大クラス（教師２名：学生100～120名）で，③は英語小クラス（教師１名：学生10～12名）で行っている。

本稿では上記の模範を，母国人を凌駕するとも言われる英語力を苦闘の中で習得された鈴木大拙の外国語学習法に求め，いかに英語学習はあるべきかを考えてみたい。

１．鈴木大拙の略年譜

1870年　町医者鈴木良準の四男として金沢市に生まれる。
1875年（６歳）父親死亡。
1887年（17歳）西田幾太郎らとともに第四高等中学校予科編入学。家計の都合で中途退学。
1889年（19歳）石川県飯田小学校高等科英語教師となる。
1890年（20歳）母親死亡。
1891年（21歳）東京専門学校に入学。鎌倉円覚寺にて参禅を開始。
1897年（27歳）中国古典英訳の助手として渡米。編集部員として，イリノイ州ラサールに留まること11年。
1909年（39歳）12年ぶりに帰国。学習院講師，ついで東京帝国大学講師となる。英語を担当。
1911年（41歳）米国外交官の娘，ビアトリス・アースキン・レーン嬢と結婚。
1921年（51歳）大谷大学教授となる。英文雑誌「イースタン・ブディスト」を創刊。初めて本格的な学究生活に入り96歳まで続ける。大拙の研究者としての生活はこの40年間に熟成される。
1936年（66歳）オックスフォード・ケンブリッジ等の諸大学にて「禅と日本文化」を講ずる。
アメリカの諸大学においても同テーマで講義を行う。
1939年（69歳）ビアトリス夫人没する。
1949年（79歳）日本学士院会員となり文化勲章受ける。ハワイ大学で禅について講義する。
1950年（80歳）プリンストン，ハーバード等の諸大学にて「仏教哲学」を講ずる。
1951年（81歳）コロンビア大学にて「華厳哲学」を講ずる。将来の秘書となる岡村美穂子との初めての出会い。
1952年（82歳）コロンビア大学客員教授となる。以後数年間続講。
1958年（88歳）秘書岡村美穂子を伴って帰国。以後8年間松ヶ岡文庫を住居とする。
1961年（91歳）親鸞上人の「教行信証」の英訳。
1964年（94歳）ハワイ大学第4回東西哲学者会議に出席。
1965年（95歳）腸閉塞のため東京聖路加病院にて急逝。

興味をひかれるのは，６歳で父親を失った後，苦学し19歳で英語教師となられたこと。その後，いずれの学校も中途退学し，27歳の時，最終学歴が中卒で渡米し，アメリカで苦闘され，40歳から51歳までは洋行帰りの英語教師として

大学で教鞭をとられ，その後に本格的な禅の学究生活に入られていること。どのようにして彼は日本で英語を習得し，19歳で高等中学校英語教師となったのか，27歳での初めての渡米時にいかにして中国古典を英訳できるまでの語学力をつけていたのか等々，興味が尽きないのである。しかし，大拙先生はその著作の中で20歳までの生活については多くを語られていないのである。ゆえに以下の数少ない関係者の鈴木大拙に対する発言から彼の学問姿勢について憶測をしてみたい。

２．鈴木大拙の学習法

(1) 徹底した漢文の素読を通しての言語文節構造の体得（27歳での渡米前）

「大拙先生は禅が如何に「漢文字」及び「漢文学」と深くむすびついているか繰り返し強調しておられた。漢文字の妙所は，禅と同じく描いて説かぬところにある。それぞれの言語は，独自の文節構造を保持しているゆえに言語として定住しているのである。」（上田閑照）

現在のように様々の教材器具がない時代の外国語習得法は，ただひたすら声を出して読む只管朗読であったように思える。一昔前のNHKのテレビ英語講座中級の講師で第１回アポロ月着陸の日米同時通訳をされた國広正雄先生が推奨されていたのもこの方法であったように思える。先生御自身も中学時代に教科書を最低500回以上，只管朗読されていたと聞く。欧米人の驚嘆するほどの素晴らしい英文を書かれた新渡戸稲造，岡倉天心なども，この方法により英語の基礎を築いたと思える。この原始的とも思える方法が，土台作りで大きな力を持っていると思える。

(2) 英語への翻訳作業を通しての英語論理に基づくライティング能力の習得（27歳～51歳）

「大拙は12年間での生活で，言い知れぬ生活上の苦労を味わいつつ過ごし，自分の思想形成の基礎を固めた。苦労の最大のものは，自分の口すらすすげぬ生活基盤の覚束なさであった。明治33年７月にはオープン・コート編集室の校正掛をしているが，『別に給金らしきものを受け取らざれど多少か熟練したる暁には，そこばくの報酬をくれるつもりならんと信ず，ぐづぐづして月日のみ経過すること如何にも残念なれど，貧乏にはかてぬ今の身分，何も辛抱と我慢致しをれり』と認めている。……11年あまりのアメリカ生活で大拙がなした最大の学的業績は『大乗起信論』の英訳であろう。明治31年６月では，『起信論の英訳中，時々中絶しやうかとも思ひ大閉口の次第』と述べている。」（堀尾 孟）

渡米後，出版社の校正掛等で細々と生計を立てていたようであるが，その時の苦しい経験が後の大拙の業績の礎になっていると思える。彼は渡米後，東洋的心情の感傷性には批判的であり西洋の合理性を説いているが，この時期に体得した英語独特の論理性がその言葉を言わしめたのかもしれない。この雑誌校正への知的作業への習熟が後年の欧米人の驚嘆する英文を生み出す土台となっていると思える。

(3) 言語から離れて人間の心を伝えようとする姿勢（51歳～）

「学習院の学生であった私が鈴木先生の静かな家を訪れると，玄関の壁に “The world is my country, to do good is my religion" の木の札があった。そして玄関を開けると線香の香りが漂い，家じゅうに拾われた猫が七，八匹もいた。それが昼寝をしたり歩いたりしていた。私は英語担当の鈴木先生に計りしれぬ感化を受けた。なぜならば，高等科１年の時，先生に案内されて円覚寺に生き，そこから私の一生の精神的な方向が決定した。」（犬養 健）

「鈴木大拙先生の無限の使命感を感じる。その源は，学生時代における参禅の発心で，自分自身の救いという問題であったに違いない。そして，禅の道を求めていくうちに禅を西洋にも

伝えねばならぬ，西洋人，ひいては人類のためになるという信念が先生に生じていったのであろう。」（西谷啓治）

「当時，82歳であった先生は，コロンビア大学付属のバトラー・ホールに住んでおられた。部屋には，長椅子に机，革張りの大きなアーム・チェアーが置かれていました。それらの家具の間には，足の踏み場もないくらいに書籍類が積み上げられていました。英語や日本語の本だけではありません。ギリシア語やヘブライ語の辞典，梵語や漢籍等々。漢文の木版本には，先生が何の気がねもなく書き入れをなさっていました。……先生の部屋を訪れたとき，私がもう一つ感じたことがあります。先生は私と話しをされていて，何か疑問に思うことがあると，すぐに辞書をひいて熱心に調べられるのです。英語の辞書でなければラテン語の辞書，ラテン語の辞書になければギリシャ語，最後にはヘブライ語の辞書まで引っ張り出してみておられるのです。私がいるとか，いないとかまったく意識しておられないご様子が心に残っています。」（岡村美穂子）

「羅漢の如く人間離れしているが非常に情に細やかで，無頓着のようであるが事に忠実で綿密である。堪え難い人事に遭遇して困る困ると言っているが，何処か淡々として高い山が雲の上に頭を出し，そこから世間と自分自身を眺めているようである。何らの作為というものがなく，いつも深い人間愛の涙をたたえている。」（西田幾太郎）

「鈴木博士はどの講義においても，注意深く考え抜かれ，慎重に選ばれ，逆説的な軽快さに富んでいて，しかも直接的で，力強く，心の防備をほぐす端的なことばであった」。そしてさらに「うっかりするとあざむかれるほどに単純な英語，しかしそうであるからこそ，その英語は，この種の思想―生命の中心に触れているが故に明晰で基本的な思想―を伝えるのに，最も適していたのである。（『回想　鈴木大拙』春秋社）

以上のコメントを集約している大拙のドイツ語からの英訳を最後にあげておきたい。原典はリゲルのドイツ語版『弓道における禅』である。

“Man is a thinking reed but his great works are done when he is not calculating and thinking. “Childlikeness" has to be restored with long years of training in the art of self-forgetfulness. When this is attained, man thinks yet he does not think. He thinks like showers coming down from the sky; he thinks like the waves rolling on the ocean; he thinks like the stars illuminating the nightly heavens; he thinks like the green foliage shooting forth in the relaxing spring breeze. Indeed, he is the showers, the ocean, the stars, the foliage."（『鈴木大拙とは』岩波現代文庫）

言葉と肉体が完全一致することが究極の言語教育の目的であろうが，ここまで到達された鈴木大拙は超人に思える。

３．現代医学生のストレスの種類とその解決法

前章で述べた強い使命感と動機を持って生涯を生きた鈴木大拙に対して，本学生の学習姿勢はどうであろうか。平成24年度10月26日に英語大クラス（第４学年）で実施した英作文を資料として考えてみたい。

実施者：芝田 敬准教授，Ms. Lamia Mohamad 非常勤講師

対象者：第４学年108名

英作文トピック：Write about the stresses medical students face and your ideas to improve the study of medicine in Japan. Use an English essay style with a topic sentence, supporting sentences and a conclusion.

実施方法：学生（108名）に講義時間90分の中の後半45分を使って英作文を書かせ，終了のチャ

イムとともに提出させた。英語辞書の使用は可とした。

作文例：There are three stresses medical students face, I think. First, the medical students sometimes feel pressure from their parents, teachers and the people around them. Some people think the doctor is worth respecting because if he / she falls ill, the doctor can help or treat. So people say to us “You must be a great doctor and so you should study more and more.” Those words make us very stressful.

Second, they have many duties, for example, many desk studies and in-hospital training. But science keeps changing and the medical keeps progressing. If we study a lot thing and remember many diseases and also treatments, of course the base of them is not.

The last, they have legal responsibility. The medical students will be doctors in the future, you know. And they the doctor is sometimes entrusted the life of a patient. The doctor can use the dangerous medicine to save his / her life and also do high risk operation which may lead a patient to dangerous situation.

Unfortunately, the medical students can't escape those stresses so they must face them. I think the best thing their stresses release is to listen their troubles positively. And the medical students must do anatomy practice in the 2nd or 3rd grade. I studied anatomy practice in the first grade but I couldn't understand detail because I didn't study a lot yet. The change of curriculum may improve the study of medicine in Japan.

注：上記の英作文は１例として提示した。文法的ミスはいくらかあるが修正はせず原文のままタイプした。

調査結果の出し方：実施者は108名の学生の英作文を読み，学生の抱えているストレスの種類と彼らの改善案を分類した。下記の図１～図８はその分類の結果であり，数的に多いものだけを取り上げた。各図の縦軸は人数，横軸は平成24年度１学期期末試験英語の成績順位をもとに上（１～30位），中（31～60位），下（61～108位）に分けたものである。

(1) 医学生のストレスの種類

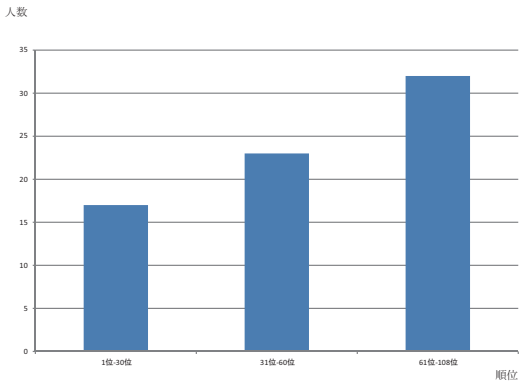

図１　医学部の膨大な学習量
（中下位層の学生のほぼ全員が医学部の学習量の多さに圧倒されている。）

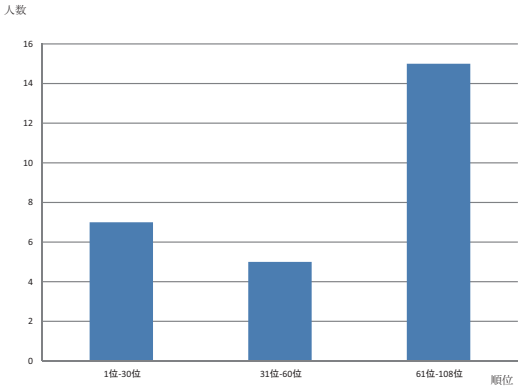

図２　医学部の試験回数の多さ
（下位層の学生のほぼ半分が試験回数の多さにストレスを抱いている。）

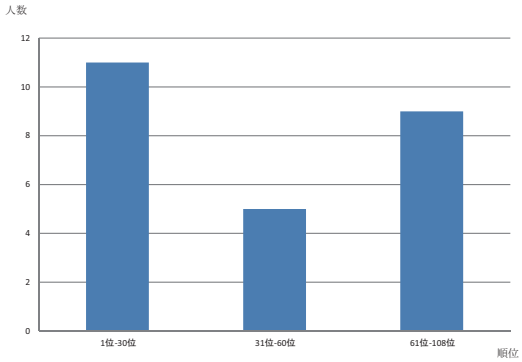

図３　医師としての将来の人間関係
（上位層の学生のほぼ半分が将来の人間関係に不安を抱いている。）

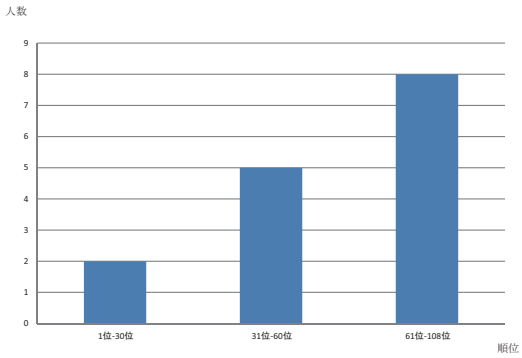

図４　自主学習の時間不足
（下位層の四分の一の学生は自主学習する時間が不足していると感じている。）

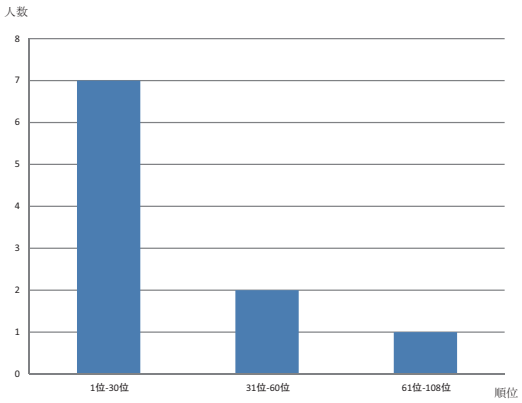

図５　基礎的な教養知識の不足
（上位層ほど基礎的教養知識が不足していると感じている。）

(2) 医学生のストレス解決法

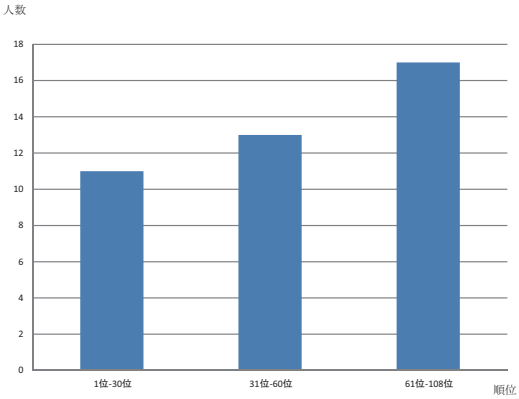

図６　医師になるための動機不足
（各層の学生の半数近くが医師になるための強い動機づけを求めている。）

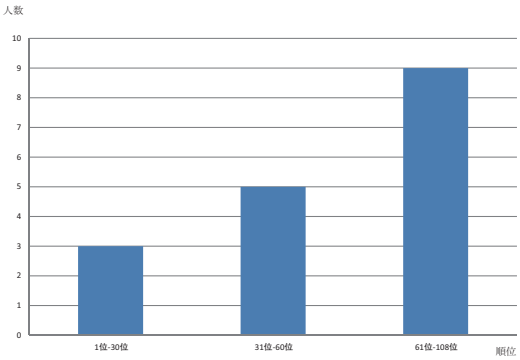

図７　自主的に学べる時間を多くする
（各層の学生の三分の一から四分の一が自主学習の時間を求めている。）

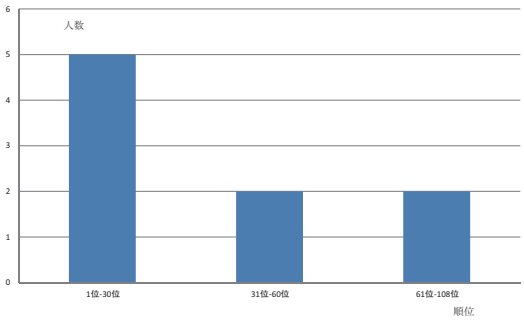

図８　低学年から臨床に入る
（上位層は，臨床に強いあこがれを抱いている。）

以上の資料から驚く１つのことに，多くの学生が医師になるための強い動機付けを求めていることである。鈴木大拙が禅に魅せられ大義をなしたと同じく，初期の動機が上手く昇華して高い理想を醸しだし，それが多くのエネルギーを噴出する原動力とならねばならないと思える。専門教科ではない英語においても同様で，強い学習のための動機付けが必要であると思える。なぜ英語を医学部で勉強しなければならないかを学生に気付かせつつ，現代に合致した効果的な英語教育を行いたい。この手掛かりを以下の国際ワークショップの資料から探ってみたい。

４．最近の大学英語教育状況

大学での英語教育の位置を鈴木大拙の(1)～(3)の英語習得過程の中に求めれば，(2)の英語の翻訳作業を通しての英語論理に基づくライティング能力の習得の段階であると思える。中学校，高等学校で英語の幹を習得した後，大学は知的レベルの向上とともに，より多くの木の葉と実をつけていく時期である。学生は適切なレベルの教材を与えられれば，それを学習する動機も生まれ，成果も必然的に生まれてくるはずである。そのような考えを巡らせている時，シンガポール，韓国，日本の大学より今後の大学英語教育のあり方についてワークショップ（7/25.2013）が東京であり，そこで今後の大きな指針をいただいた。特に韓国「漢陽大学の国際化と英語教育」と日本「立命館大学生命科学部・薬学部におけるプロジェクト発信型英語プログラム」は印象的であったので以下にその骨子を紹介する。

(1) 韓国「漢陽大学の国際化と英語教育」by Prof. Moonsub han, Ph.D.

A．Changing trend of English Education in Korea

New trends in English education in Korea from mid-1990's to present

1．goal: developing communicative proficiency
2．focus: reading → conversation
3．English education in elementary schools
4．Changes in college English education
　－teaching by native speakers of English
　－college English → practical / conversational English

Moonsub han 教授によると，1990年代より韓国では，会話能力の開発を目指す英語教育が成され，その開始時期を小学校とし，大学では英語母国語話者による実践的な会話中心の教育が行われてきた。そのプログラムを実践した後に次の５つの問題点が出たそうである。

B．Current Problems in Hanyang University, Korea

1．In one or two semesters, with three or four hours per week, the conversational skills are not improved much or at all.
2．Students who already possess certain level of proficiency in English are not at all satisfied with this program.
3．Students with very low proficiency are not satisfied either because they found out that their conversational skills cannot be improved in such a short period of time, with such a limited time, making their final grade a disaster, regardless of the amount of effort
4．Many native speaker teachers do not prepare for the class and just walk into the classroom and keep talking or let

the students talk, pretty easygoing style of teaching.

5．There is an increasing doubt if it is right to teach all college students basic daily conversational skills. It may be right to teach them more professional skills rather than teaching communicational skills.

上記のMoonsub han教授の御意見の中で，筆者にとって印象的で共感を呼び起こすものは次の点であった。「大学での限られた授業時間数の中で会話中心の英語教育を行っても成果は見られず，すでに大きな英語能力差のある大学生に対する会話中心の授業は，彼らのやる気を引き出すものではない。また，易しい教材を使用しての授業では，外国人英語教師は，ただ教室に来て学生と普通の英会話をして帰るだけでよいのではないかと思われた。」現在，漢陽大学では，もっと学生の知的レベルに合った教材で，表現力を向上させる英語教育をすべきではないかとの改革案が出され，次の３点を中心に実行されているそうである。

C．New Directions in school English program

1．From conversational skills to presentation and writing skills

2．Content-based course

3．Language acquisition occurs when the learners use the target language for authentic needs

漢陽大学では現在，会話中心の授業ではなく，専門内容に関連する教材を使ってのプレゼンテーションと作文能力の開発の英語教育が実施されている。筆者も言語習得は目標言語の教材内容が学習者の知的レベルに合っている時に初めて成果が期待できると確信している。

(2) 発信型英語プログラム（立命館大学生命科学部・薬学部）

1　主要言語は英語。英語を世界言語(global language)として扱う。

2　英語の文献や資料を読み，情報を分析して英語で発信する。

3　発信方法としてwritingに焦点を当てる。宿題も含め多量のwritingを行う。

立命館大学の発信型英語プログラムも大きな成果を上げ，現在注目されているが，その目標としているものは漢陽大学と同じであると思える。

5．川崎医科大学英語教育プログラムの課題

川崎医科大学でも，以上の２大学と同じ方向性を持つ英語読解力・表現力を重視するプログラムを４年前から実施し現在進行中である。その途上で感じた以下の３点を今後の課題として述べ，筆を置きたい。

(1) 海外医科大学との交流

鈴木大拙が27歳で渡米後，英語力で開眼したと同じように，学生が直に異なる文化に触れ英語学習に取り組むことが必要である。本学では年を追うごとに多くの学生が海外渡航して学習してみたいという希望を持っているようである。彼らがそのための助言を求めに来たとき「１人で日本の空港から飛び立ち，学習をするのに最適だと感じる国・大学に行き生活してみなさい。」ということにしている。異文化の壁に衝突してsurviveするために格闘することが大切であると思える。

(2) プレゼンテーション技術の向上

今回の東京オリンピック招致で脚光を浴びているプレゼンテーション技術の向上が望まれる。「沈黙は金なり」といった文化を持つhomogeneous peopleの住む日本で，プレゼンテーションの必要性は過去においては求められなかったかもしれない。しかし，現在では全てが変化し，お互いの思いを共通の国際語である英語で上手く伝え合う必要性が増している。本学

でもその必要性を満たすために英語的論理を基軸とするプレゼンテーショントレーニングを実施している。学生たちのプレゼンテーション技術は向上していると思え，今後も確実に進歩してくと信ずる。

(3) 語彙力のアップ

昨年度より学期に１～２回の単語テスト（１回に50問）を第１学年～第４学年で実施している。当初は悲惨な成績であったが，学生達の取り組む姿勢は着実に向上している。(専門の)語彙力を増加させることは，彼らが国際社会の中での医師になるのであれば生涯にわたって継続していかなければならない作業である。どのレベルの単語を使えるかは多くの苦闘と経験の成せる業で，それがその人の言語的品性を決めるもののように思える。なぜ多くの外国人が鈴木大拙の講演や対話を通して彼に魅せられたかはこのあたりにあると思える。「国際的に信頼される良医」の育成のために，英語教育の面から一助となればと願望する。

参考文献

1）上田閑照，岡村美穂子：鈴木大拙とは誰か．岩波書店．2002

2）上田閑照：大拙の風景．：鈴木大拙とは誰か．燈影舎．1999

3）上田閑照，岡村美穂子：思い出の小箱から－鈴木大拙のこと．燈影舎．1997

4）鈴木大拙：鈴木大拙全集第32巻．岩波書店．1971

5）Daisetz T. Suzuki : Zen and Japanese Culture. Tuttle. 1988

6）Moonsnub Han, Ph. D. : Globalization and English Education in Hanyang University, Seoul Korea. 2013

7）Prof. Yuji Suzuki, Ph.D. : Project-based English Program in School of Life Sciences Ritumeikan University. 2013